

NIJINO KAKEHASHI
虹の架橋

今月の題字
水島 清さん

(大間々町1丁目)

鮮魚仕出し、和食処「UOYA」の水島さんの趣味は魚釣り。清さん・八重子さん夫妻は二人揃って気さくで人情味豊か。足利屋と長〜いお付き合いです。

虹の架橋 ↑検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

三百八十八年目の大間々祇園祭
足利屋で祭見物をどうぞ
八月一、二、三日は伝統の大間々祇園祭です。大間々祇園は五穀豊穡や絹市の繁栄を願い、神明宮の初代・大楽院勝尊が京都八坂神社の御分霊を三丁目(現在の三丁目集会場)に祀ったのが起源。大間々祇園は「振るまいの祭り」とも言われ、近郷近在から集まる人達に、日頃の感謝を込めて飲食を振るまつて歓待していました。



去年の大間々祇園祭の様子



足利屋から見た去年の祇園花火

祇園祭の期間中、足利屋の休憩コーナーでは、明治二十五年から昭和三十年代の大間々祇園祭の写真展示いたします。地元育ちの方々は子どもの頃の自分の姿や家族友人の懐かしい姿を発見できるかもしれませんのでご覧下さい。祭り期間中の午後は本町通りが歩行者天国のため、足利屋裏の駐車場をお気軽にご利用ください。3日8時半からの花火大会は足利屋からご覧いただくのが最高です。岡商店の土蔵の白壁の上に開く大輪の花火は大間々祇園最終日を飾る風物詩にもなっています。



いい話
(文責・靖)
《264》

足で歩いた頃のこと

小耳にはさんだ

星野富弘さんの新刊『足で歩いた頃のこと』(偕成社)には、ここ二十年ほどの間に描かれた六十三点の詩画と十六編の随筆が収められています。

富弘さんは、群馬大学を卒業後、体育教師になりましたが、クラブ活動の指導中に頸椎を損傷し、首から下が全く動かなくなっていました。

富弘さんは、群馬大学を卒業後、体育教師になりましたが、クラブ活動の指導中に頸椎を損傷し、首から下が全く動かなくなっていました。入院中、お見舞いの手紙に返事が書きたくて、筆をくわえて文字を書き練習をしました。何とか短い手紙が書けるようになり、紙の余

白に枕元にあつた花を描くようになり、それが現在の富弘さんの「詩画」という形になってきたのだそうです。富弘さんはあとがきの中で、「生きる希望を失いかけていた私に、詩画は思ってもみなかった素晴らしい出会いをもたらししてくれた。踏み付けはしても、手に取って見ることもしなかった花との出会い。絵を贈った人は私の結婚相手になり詩画の向こう側から次々と助け人が現れた」と書いています。そして、「行く先が決まっているのが旅行

世界一小さな
定利屋
トイレ美術館

今月の絵《264》

大野勝彦さん『幸せになれます』



熊本県南阿蘇村の大野勝彦美術館へ行ってきました。去年の熊本地震で美術館へ通じる阿蘇大橋が崩落し、美術館からの景色も一変してしまいましたが大野さんの熱い思いが叶い、再開の間に大野さんが義手で似顔絵を描いてくれました。靖さん、このお顔に出逢えた人は幸せになれます。ただしその有効期間はせいぜい一年、いや一カ月となっています。だから出来たらチョコチョコ逢うことをおすすめします。この似顔絵を名刺にも使わせてもらいました。

靖ちゃん日記

七月七日(金)
今日の「山田雅人かたりの世界、永六輔物語」は大盛況だった。去年の秋、武蔵嵐山志帥塾で初めて山田さんのひとり語りを聴いて感動。大間々に呼びたいと思った。山田さんが相田美術館で、「相田みつむつ物語」を語った時に知り合った人達も泊まりかけで来てくれた。いよいよ本番。今日は幕引係、三色の定式幕を開けると客席から一斉に拍手。自分が拍手をもらっているようで嬉しかった。舞台のそでで見ていると、山田さんの絶妙の語り客席がどっと沸き、劇場全体がひとつになつていっているを感じた。第二部は、「ゴール萌」のコーラス。永六輔さん作詞の「上を向いて歩こう」をみんなで歌っているうちに山田さん夫婦やお泊まり組の人たちも参加して何度も乾杯。十時を過ぎても誰も席を立たないのでそろそろお開きにしようかと声をかけた。今日は最後まで幕引係だ。



今日は最後まで幕引係だ。



で、行く先も帰るところも決まっていけないのが旅だという。絵を描くのも文章を書くのも旅に似ている(中略)
明日のことがわからない人
生も旅なら、私はベッドの上で壮大な旅をしようと思つている」と結んでいます。

時代は変わりましたが
今の子供達も皆
母が大好きです
お母さんが大好きですよ

母という文字の中に
遠い昔の人よ
あなたにも
優しいお母さんが
いたのでしょうね



朝顔を揺らし簾をくぐる風
我が家といきいきと
ンターの境のフェンス
に今年もアサガオが咲きました。足利屋の事務所の窓のすだれ越しに、グリーンカーテンのように蔓を伸ばした葉と蕾と紫色の無数のアサガオが風に揺れているのを見ていると時の経つのを忘れず。
「アサガオが朝開くのは、夜明けの光とか温かな温度のせいではない。夜明け前の冷たい夜の時間と闇の濃さこそが必要なのだ。アサガオは夜の闇の中で花を開く準備をするのだ」と五木寛之さんが書いています。私たちは自然の営みから大切なことを学んでいます。

第二六五号は九月一日(金)発行予定です。